

口絵 2



茨城県つくば市平沢3号墳出土骨蔵器

終末期古墳の横穴式石室前庭部に置かれていた、奈良時代の骨蔵器である。茨城県つくば市平沢3号墳から出土した。現地表面から20-30cm程度を掘り進めたところで、まず壺がやや傾いた状態で発見され、その後、杯が壺に寄り添うように出土した。いずれも完全な形を保っている。茨城県新治窯跡産の須恵器とみられるが、現在知られている同窯跡産の製品と比較すると、見違えるほど繊細で優麗な作りである。

平沢3号墳は典型的な終末期古墳の一つであり、7世紀に築造された。地元の筑波山から産出される石材を使用した複室構造の石室が、石材生産地における使用例として注目を集めてきた。しかし、近年では大雨などにより前室部分の崩壊が進んでいたため、土地所有者から一部解体修復をしたい旨の意思表示があり、2007年に茨城大学人文学部考古学研究室とつくば市教育委員会が協議し、急遽、合同により発掘調査を行ったものである。

壺の中には土が充満し、何も残っていなかった。しかし、壺の蓋として杯を被せた様子が復原できる位置関係、埋納物と判断できる出土状況、器種組成の類例から考えると、火葬骨蔵器とみてまず間違いないものである。

(写真：茨城大学考古学研究室提供 田中 裕)